

The Trumpet-Major :

時による愛の変容

内 藤 歓 修

既に1874年*Far From the Madding Crowd*を世に送り出し、文壇における地位を確立したハーディは、更に1878年には作者中期における最大の傑作の1つ*The Return of the Native*を出版した。ウェセックス地方を舞台にして、その舞台が登場人物の外貌や性格、行動、運命にまで深く強い影響を及ぼし、物語の筋をも支配する大きな力となって行くという、典型的な「ウェセックス小説」を書き上げたのである。現在ではハーディの代表作で、英語の散文の大作の1つと見なされているこの作品も、発表当時は芳しい評価は受けなかった。当時のヴィクトリア朝の時代的嗜好や社会意識と大きく乖離しており、時代には未だその受け入れ態勢が整っていなかったと言えよう。次に出版されたのが本作品*The Trumpet-Major*である。

これはハーディが幼少時代から常に変わず継続して興味を抱いて来たナポレオンの主導する戦争、ここではナポレオンのイギリス侵攻に脅かされている時期（1804年～5年）¹⁾を背景にしている。ナポレオン戦争に関しては、祖父が義勇兵（volunteer）であったり、家に名残りの品々が残っていたり、*A History of the Wars*という雑誌を愛読していたり²⁾という以上に、一族の中にネルソン提督の乗った旗艦「ヴィクトリー号」の艦長トマス・ハーディがいたという誇りのために、強い関心を持っていたのである。この戦争を主題にして、晩年の大作で壮大な叙事詩*The Dynasts*が発表されるが、これに結晶される過程の途中で作者の頭に浮かんだ1つのエピソードがここで扱う*The Trumpet-Major*であった。

1880年1月号から12月号まで1年間、スコットランドのキリスト教雑誌*Good Words*に連載された*The Trumpet-Major*は、必ずしも前作*The Return of the Native*のように際立った個性を持った作品というわけではない。連載の前年6月に、このとりわけ宗教的な色彩の濃い家庭的教養娯楽誌の、牧師の編集者ドナルド・マクレオドはハーディに手紙を出し、この小説は「健康的、男性的で率直でなければならないとし、真に宗教的で家庭的な人々の感受性を傷つけそうなことは何でも避けなければならない」³⁾と注意を喚起している。この要請は作家ハーディの意識に強く作用したようで、前作*The Return of the Native*では殆ど消滅してしまった一般社会の共通概念としての「常識」がこの作品の中では復活し、社会の枠組み、生活様式を支える確固とした価値観を生じ、十分に機能している。教会にしても、*The*

*Return of the Native*では結婚式か葬式の時くらいしか行くことはないが⁴⁾、*The Trumpet-Major*ではAnneは日曜日には祈祷書を片手に帰宅するし、兵士たちの集まるパーティにしても羽目はずしての馬鹿騒ぎをすることを慎むという公序良俗は堅く守られているのである。このような舞台設定のもとで、ハーディは「彼の本の中で、最も明白に娯楽として意図されたもの」⁵⁾を書き上げた。

前作と比べれば陽気で健全な作品と言えよう。宗教的で固い編集者とその読者に気兼ねし、彼らにおもねるという姿勢でサービス精神を発揮し、娯楽性に終始して書き上げたのだと言われても仕方がない面もある。物語の筋は比較的単純で、ゆったりとしたペースを保ち、やや引き延ばされた感じで、ほぼ直線的に進んで行く。ナポレオンの軍隊がイギリスに侵攻して来るという噂に怯えるウェセックス海岸の農村を舞台として、ラッパ隊長のJohnと弟のRobertのLoveday兄弟が、Loveday家に同居するAnne Garlandに恋愛感情を抱くことを軸に、近くに住む吝嗇の地主Derriman老人の甥Festus Derrimanがそれに絡んで、最後にはRobertがAnneと結ばれることになる。Festusは女優のMatilda Johnsonと結婚し、Johnは真の愛を貫いて、弟のために自己犠牲となり、スペインの戦場に死すべく去って行くのが主筋として語られる。更にはストーリーの複雑化を意図して、ナポレオン軍上陸に備えての農民たちの俄訓練、ナポレオン軍上陸の誤報が引き起こす混乱、突然の活劇であるプレス・ギャング（水兵強制募集隊）との攻防、ジョージ三世やネルソンの旗艦の船長トマス・ハーディといった歴史上の人物の登場、Derriman老人の財産にまつわる話などが副筋としてこの主筋に複雑に交叉し絡まって行く。

*The Trumpet-Major*は歴史小説とされているが、上述の主筋・副筋の中で歴史上の人物が中心となって活躍する場面はない。ジョージ三世にしても、ハーディ艦長にしても脇役として出て来るだけである⁶⁾。外は殆ど想像上の人物である。作者は小説の素材を歴史に求めただけで、歴史的事実を利用してはいるが、物語は大半想像上のものである。飽くまで歴史を背景にただけであり、歴史物語とは必ずしも言えない。ナポレオン全盛時代という歴史を背景に、大衆性・娯楽性が色濃く滲んでいる、Anneを中心としたJohn, Robert, Festusの恋の多角関係が展開する。この一見喜劇的な物語の中に読者は、娯楽的要素や風刺性を含んだユーモアの中に「時の無常」や「真の愛の姿」をはっきりを見せられ、肅然とした気持ちにさせられる。以上が、制約の多い*Good Words*誌にハーディが載せた際に取った小説作法であったと言えよう。矢張りハーディは常にハーディであったのである。

前述のようにこの物語は歴史小説の形式を取っている。その素材は、1895年版*The Trumpet-Major*の作者序文にある通り、「一連の他の作品より多くの証言一口述並びに記述一に基づいて」おり、「話の進行を導く外的な出来事は、著者が子供時代よく知っていて、今では亡くなって久しい老人たちの思い出を殆ど誇張せずに再現したもの」である。更に当

時の新聞や生の資料等を使用したと説明しているが一方、「生き残った人たちによってもたらされる断片的な情報から、筋の通った過去の物語を組立てようとする者は、無差別に思い起こされた出来事の、真の筋道を確かめることの困難さに気づく」のであると言っている。この言葉でも推量できるように、素材が史実に基づいており、実際に生きていた老人たちの記憶の証言であっても、この物語自体は、再現（reproduction）をすることによって、著者ハーディの意識のフィルターを通して再構築された虚構に他ならない。物語の経過や結末を知る作者は「今」という時において、「歴史」という過去を物語ることにより、時間と空間を小説の中で自由に往来し、変更する特権を持つことができるのである。「今」となっては全て終わってしまった「事実」を回想し物語る時、作者の脳裏には、時が消滅や死というものをもたらし、音も無く通り過ぎて行ってしまったのだという慨嘆や、歴史的事実と子供時代の記憶が混ぜ合わされた、永遠に戻って来ることのない過去が生き生きと懐かしさを漂わせながら、幾度も去来したと思われる。

ある晴れた夏の朝、Anneは作りかけている炉の前に置く敷物の毛糸を測りながら、暫くの間手を休めて退屈な様子で窓際から外を眺めていた。

Immediately before her was the large, smooth mill-pond, over-full, and intruding into the hedge and into the road. The water, with its flowing leaves and spots of froth, was stealing away, like Time, under the dark arch, to tumble over the great slimy wheel within. On the other side of the mill-pond was an open place called the Cross, because it was three-quarters of one, two lanes and a cattle-drive meeting there. It was the general rendezvous and arena of the surrounding village. Behind this a steep slope rose high into the sky, merging in a wide and open down, now littered with sheep newly shorn. The upland by its height completely sheltered the mill and village from north winds, making summers of springs, reducing winters to autumn temperatures, and permitting myrtle to flourish in the open air.

The heaviness of noon pervaded the scene, and under its influence the sheep had ceased to feed. Nobody was standing at the Cross, the few inhabitants being indoors at their dinner. No human being was on the down, and no human eye or interest but Anne's seemed to be concerned with it. The bees still worked on, and the butterflies did not rest from roving, their smallness seeming to shield them from the stagnating effect that this turning moment of day had on larger creatures. Otherwise all was still. (Chap. I)

Anneの目に映っているのは、オーヴァークームの夏の朝の光景、長閑な田園風景である。私たち読者も彼女と同じ視線を、窓のすぐ下で満々と水を湛えている水車用貯水池、その向

こう側の十字路と呼ばれる広場、その後ろに広がる羊が点々と散らばっている牧草地、そして村を取り囲む高原地（ダウン）に向けて行く。ハーディの確かな筆致により、私たちは何の抵抗もなく Anne の住んでいるオーヴァークーム村の中に入り込んでしまう。この村は高原地に囲まれ閉ざされた世界となっていた。これが盾となり外の自然の厳しさは和らげられ、そこに居住し、棲息するものには恵まれた環境となっていた。地勢的に閉ざされ、外部から守られているオーヴァークームは、社会の変化に伴う歴史的時間の影響を受けることが少ない。後述するように、村の外で起こる出来事の情報には2週間遅れの新聞によって、やっとゆっくりとした速度で伝えられる。しかし、この新聞によるニュースの伝達の様子でも示されているように、外界から隔絶されてはいるが細々とした繋がりは維持している。十字路広場（the Cross）は村のあちこちに繋がっているばかりでなく、外の世界にも通じている道の存在を示している。その上貯水池から絶えず溢れて流れ出している水は、作者が強く意識している「時間」の直喩として、この村に忍び込み、流れて行くのである。閉ざされて外から影響を受けることのない世界に見えるこの村も、決して変わることはない世界ではなく、外部から常に浸食され、殊に時間による変容を余儀なくされる世界である。またこの世界が時間の経過の作用により変容する事象は、「神聖な生命の糧」（第1章）として拒否することのできない粉挽き場の小麦の細かな粉が、Anne と母の部屋に密かに進入して来ることによって表されている。細かい粉でできた薄い霧として侵入し、家具などの上に白く積もって、いつのまにか経過した時間を表し、自己の存在を主張している。積もった粉は最上の家具に青白い亡霊のような様相（a pallid and ghostly look）を与えており、時間による変容が死まで含んでいることを示している。

この静寂に包まれた、閑寂なオーヴァークームの丘の上に、イギリス軍の大部隊が突然現れ、あっという間にキャンプのテントの設営を始めた。この出来事を発端にして、Garland 母子、Loveday や村人たちは騒動や事件に巻き込まれて行く。このウェセックス海岸地方の村人たちも、当時、ナポレオン軍が英国に侵攻するという噂で怯えていたにしても、平和なこの土地の草原に、現実に突然軍隊がやって来たのにはびっくり仰天するのも無理はない。作者はこの驚きを ‘the extremest form of consternation’ など誇張して大げさな言葉遣いをしている。作者ハーディはこの物語をユーモアの中に風刺を利かせた文章で語って行く。

Miller Loveday を紹介する語り口も、ユーモアの中に、多少の揶揄と皮肉が利いたものとなっている。彼は由緒ある粉屋だが、昔は馬皮のなめし業者、更に大昔の霧の中にあるのはチェオール（ceorl）と呼ばれる自由農民であり、古い時代の著名な英国貴族と同時代人であったが、ただそれだけで本音の所は、何処の馬の骨か分からないというのが真相であろう。Loveday の父の業績は精々「新しい煙突を作り、もう一組石臼を備えた」だけなのに、住居の価値を大いに高めたと、距離を置いて化けの皮を剥ぐような結果を招く大袈裟な表現をし

ている。後に *Tess of the d'Urbervilles* の悲劇に繋がる、由緒あると思われている家系、世間で間違って信じられている身分階級に関するものに対して冷めた観察をし、皮肉な笑いを誘っている。

Loveday の住居側も時間の網からは逃れられない。「使い古された家という様子で川の方にずり落ちそうになって」おり、「その反対側の端は蔓草に半分覆われて」いる。閉ざされたこの世界の内部でも時間が引き起こす変容が進行している。また前庭に立っているカラマツモミの棒には人の形をした風見が付いていた。

It [a pole of larch fir] rose from the upper boughs of the tree to about the height of a fisherman's mast, and on the top was a vane in the form of a sailor with his arm stretched out. When the sun shone upon this figure it could be seen that the greater part of his countenance was gone, and the paint washed from his body so far as to reveal that he had been a soldier in red before he became a sailor in blue. The image had, in fact, been John, one of our coming characters, and was then turned into Robert, another of them. This revolving piece of statuary could not, however, be relied on as a vane, owing to the neighbouring hill, which formed variable currents in the wind (Chap.II)

時間を自由に移動し見渡すことのできる作者は、過去の時間による変容を語る中に未来の変容についての暗示を含ませている。庭に立っている棒の上にある人の形をした風見は、この後登場して来る、Loveday の2人の息子、34歳の John と28歳の Robert の、少年期の昔と成人に達した現在の間の時間の経過を物語っている。風見の人形が初めは、John の姿であったものが後に Robert の姿に変えられたという経緯を説明することで、Anne を巡る兄弟2人の愛の葛藤の行く末を暗示している。その風見の向きは色々変わってしまい、余り信用できないということは、Anne に対する Robert の想いが一定していないことを示している。作者は過去における変容が、その後に起こる変容の中に繰り返えられること、即ち過去の中に未来を暗示している。このような意味合いを持つ道具立ては Derriman 老人の住むオクスウェル邸にも見られる。この邸は Loveday の水車小屋と同様に時間による変容を受けて古び、殆ど廃墟同然といった屋敷である。しかし水車小屋は古びた建物であり、閉ざされた世界を形成してはいても、外部の世界との接点は幾つも持っていて、新陳代謝の機能は維持しているが、Derriman 老人邸にはそれがない。新聞を手に入れても、誰かに読んでもらうしか方法がないし、読み手の Anne が訪ねて行っても用心深く簡単には戸は開けられない。常に危機に対する防御の姿勢を取っている。彼のオクスウェル邸はただ頑なに閉じ籠もり、行き場のない世界を表しており、物語の終局での彼の死の姿はここに暗示されていよう。

Anneが眺めている窓の外では、数人の兵士たちが現れ、やがてこの村の粉挽き小屋の近くに竜騎兵連隊が野営することが分かる。Anneの眼前で、今まで噂に過ぎなかったナポレオンのイギリス侵攻の危機による社会不安という過去の歴史の一局面の、そのごく一部が現実に展開されることになる。竜騎兵連隊がこの村で野営をすることは、この閉ざされた世界への外部からの侵入、同時にAnneの閉ざされた意識への外部の世界の侵入を意味する。しかし、Garland母子の反応は危機を認識する局面とは程遠い所にあった。兵隊を初めて眼にした時、Anneは「お母さん、お母さん、ちょっと来てよ！きれいよ！」と興奮した声を上げたり、母親Marthaは「一番いい帽子をかぶっていいわね」などと考えたりする。彼女らや殆どの村人にとって、この竜騎兵連隊の野営は、見た目の華やかさや活気に満ちた動き、きらびやかな式典などが、平和な日常の退屈から、興味や興奮に満ちた非日常の楽しさに導いてくれる見事な見せ物という認識しかなかった。社会的に不安な動揺が、‘cheerful as they were in themselves’ としか認識できなかいのである。ここには*The Return of the Native*のEustacia, *Tess of the d’Urbervilles*のTess, *Jude the Obscure*のSueといった近代的自我に苦しむ女性像を見出すことは難しい。この制約の多い雑誌の連載で、自意識に目覚める前の、閉ざされた世界に生きる、ごくありふれた平凡な女性であるAnneの眼や意識を通して眺められるラッパ隊長Johnの姿と、全知の視点を持つ作者の見る彼の姿には大きなギャップがあり、Johnの行く先に待つものはハッピー・エンディングであり得ることはないと思像できよう。このギャップが生み出すアイロニーこそ、ハーディが目指したものに相違ない。Anneに受け入れられることなく、戦場の露となって散るJohnの姿は、作者のテーマに深く関わっている。既に第3章にはJohnの運命を予言する言葉が出て来る。

It was just the time of year when cherries are ripe, and hang in clusters under their dark leaves. While the troopers loitered on their horses, and chatted to the miller across the stream, he gathered bunches of the fruit, and held them up over the garden hedge for the acceptance of anybody who would have them; whereupon the soldiers rode into the water to where it had washed holes in the garden bank, and, reining their horses there, caught the cherries in their forage-caps, or received bunches of them on the ends of their switches, with the dignified laugh that became martial men when stooping to slightly boyish amusement. It was a cheerful, careless, unpremeditated half-hour, which returned like the scent of a flower to the memories of some of those who enjoyed it, even at a distance of many years after, when they lay wounded and weak in foreign lands. (Chap.III)

「今」の時点で語る語り手は「時」という霧の彼方に懐かしい穏やかな追憶の1コマを描き

出すが、同時に時による変容の究極の姿である死の影からも目を背けない。作者によって、過去の思い出の描写は一種喜劇的要素を帯びながらも、遠隔化され情緒化される。「今」の時点に戻った感想から、このすぐ後には時間を遠方に戻して兵士たちの描写が続いて行くのである。

時を自由に往き来する語り手にとって過去、現在、未来は同じ次元に属している。それ故、表現上の文法の時制は、語り手の意識と共に現実の時制から離れ自由に動いて行く。第5章のJohnの帰郷を歓迎するLoveday家でのパーティの場面では過去と現在の垣根が非常に低くなって、殆ど取り払われてしまったかのように、過去と現在が一体となった感を抱かせる描写がある。ハーディはLoveday家のパーティの描写を続けた後、今は亡き人々から何度もこのパーティの話を聞いたとし、オーヴァークームの粉屋の古い居間にいると必ずこの暖かい情景が7、80年の霧の彼方に見えて来ると切り出す。

The present writer, to whom this party has been described times out of number by members of the Loveday family and other aged people now passed away, can never enter the old living-room of Overcombe Mill without beholding the genial scene through the mists of the seventy or eighty years that intervene between then and now. First and brightest to the eye are the dozen candles, scattered about regardless of expense, and kept well snuffed by the miller, who walks round the room at intervals of five minutes, snuffers in hand, and nips each wick with great precision, and with something of an executioner's grim look upon his face as he closes the snuffers upon the neck of the candle. Next to the candle-light show the red and blue coats and white breeches of the soldiers — nearly twenty of them in all besides the ponderous Derriman — the head of the latter, and, indeed, the heads of all who are standing up, being in dangerous proximity to the black beams of the ceiling. There is not one among them who would attach any meaning to 'Vittoria', or gather from the syllables 'Waterloo' the remotest idea of his own glory or death. Next appears the correct and innocent Anne, little thinking what things Time has in store for her at no great distance off. She looks at Derriman with a half-uneasy smile as he clanks hither and thither, and hopes he will not single her out again to hold a private dialogue with — which, however, he does, irresistibly attracted by the white muslin figure. She must, of course, look a little gracious again now, lest his mood should turn from sentimental to quarrelsome — no impossible contingency with the yeoman-soldier, as her quick perception had noted. (Chap V)

語り手がヴェイルを脱いで、作者自身がこのパーティのことを回想の中で語り始める。そ

の語りは ‘the present writer’ の回想文として現在形と現在完了形の時制で語り始められる。文中の Waterloo は 1815 年にフランス軍が敗北したベルギーの地名で、作者の「今」の時から約 70 年～80 年前の事件を物語っているにもかかわらず、この筆者の幻の中の情景においては、兵士や Anne たちの姿は現在のものとして捉えられている。しかし上記引用の最後の一文で現在から過去完了形に巧みに転化が計られ、語り手は小説の人物の後ろに姿を隠し、この後、元のようにまた過去形による語りが続いて行くのである。追憶の映像を懐かしんでいるハーディは「懐かしさ」の中から彼特有の叙述の形式を生み出して行く。

ハーディの懐かしい回想には、物語ではそれ程重要な役目を与えられていない村人たちについての、ユーモアを交えてのエピソードも含まれており、作者の一方的な思い入れを越えた、読者の共感を得やすいものとなっている。同じくパーティの席で、Anne は偶々 Corporal Tullidge の側に座り、あなたのような御老人を何時も敬愛してまいりましたわと言う。この老兵は聞き違えて、自分が何故何時も帽子を被っているのかと尋ねられたと思った。そこで前の戦争での頭部の負傷のことを語ると、側にいた Anthony Cripplestraw は面白がって伍長の頭を見たくないかと、迷惑顔の Anne に平気で勧めてみる。Anne がそれを断っているにもかかわらず、お嬢さんは腕の音を聞きたいかしんねえと、腕にも負傷したことのある伍長を焚き付ける。

‘Yes, sure,’ said the corporal, raising the limb slowly, as if the glory of exhibition had lost some of its novelty, though he was willing to oblige. Twisting its mercilessly about with his right hand he produced a crunching among the bones at every motion, Cripplestraw seeming to derive great satisfaction from the ghastly sound.

‘How very shocking!’ said Anne, painfully anxious for him to leave off.

‘O, it don’t hurt him, bless ye. Do it, corpel?’ said Cripplestraw.

‘Not a bit,’ said the corporal, still working his arm with great energy.

‘There’s no life in the bones at all. No life in ’em, I tell her, corpell!’

‘None at all.’

‘They be as loose as a bag of ninepins,’ explained Cripplestraw in continuation. ‘You can feel ’em quite plain, Mis’ess Anne. If ye would like to, he’ll undo his sleeve in a minute to oblege ye?’

‘O no, no, please not ! I quite understand,’ said the young woman. (Chap.IV)

ここにも見られるように、この作品の特徴は会話の部分が多く、会話によって登場人物の性格を浮き彫りにしている。人物と状況の両方について、色々な種類にわたる喜劇的な工夫

が施され、文体自体も軽妙で、その目的に調和する喜劇性を持っている。更に上述のような、情景の遠隔化によって、喜劇的な雰囲気とは正反対の哀愁—今は失われて再び戻って来ることの無いものへの惜別の念を伴った—を引き出している。

Loveday 家のパーティの場とそのすぐ後で、Derriman 老人の邸で Anne に偶然会った Festus は、それ以後彼女が嫌がるのも気にせず、身分の高さを鼻にかけ Anne に愛を強要する。だが彼は地主 Derriman の甥ではあっても、現在大きな財産を所有しているわけではなく、義勇農騎兵隊 (yeomanry calvalry) であり、このことが階級意識の面でも待遇の面でも彼の弱点になっていて、比較されたり、からかわれたりする存在である。このことは竜騎兵連隊で赤い軍服を着た 6 人のラッパ兵の長の名誉と尊敬と比較すればよく分かる。作者は読者にはこの状況が分かっているという前提で、Festus の空威張りや悪人振りを強調している。Festus の狙うものの中には Anne のみならず Derriman 老人の全財産も入っている。Anne の悩みは母が階級も金もある Festus と仲良くすることを望んでいることである。Mrs Garland は快活で人は良いが、娘が下劣なこの男から必死に逃れようとしているのも知らずに、子供っぽい判断しか下せず、確たる態度が取れないでいる。

Anne は物語の冒頭で、「それは丁度色の淡いパセリの花の芯に、濃斑点が潜んでいるのに似ていた」(第 1 章)と紹介され、素朴な外見の中で堅実な中産階級としての品位を保つことを常に心がけている娘であった。この言葉から受ける印象は、もろい生のはかなさや移ろい易さである。これから Anne を巡って展開する喜劇的とも言える恋愛劇は、愛の移ろいを凝縮しているとも言えよう。堅実ではあるが、素朴で、男性の真価を 1 人で見分ける程世慣れていない Anne でも、Festus の人格破壊者的性格には本能的に恐怖を抱き、彼に近付かないように必死の努力をする。一方 Festus を避ける Anne と John の間は、Anne が John に対しては完全に意識を閉ざすことがない故に、強引な Festus の存在によって次第に狭まって行く。Festus は Anne の気持ちなど考えずに、無神経に境界線を越えて近付き、彼女に身の危険を感じさせる。John の方は Anne を守りつつ、決して彼女との間にある境界線を越えることはなかった。Festus を避けるために家の中に閉じこもった Anne を、John が毎日訪ね、庭に出ている彼女と垣根越しに話をする場面は、2 人の恋愛に関して象徴的である。2 人の間にある境界線を越えては入って来ない John と、越えて出て行こうとしない Anne との気持は決して通じ合うことはない。Anne に想いを寄せる John は、寄り添いたい心とは裏腹に、彼女と「15 歩の距離」(第 10 章)を保って、恋心とは関係ない当たり障りのない話を続けるのであった。この控えめの John が、やっと、それとなく自らの胸の内を明かすのは、ラッパ手としての技術を介してである。第 11 章で国王を迎えようと夜明け前丘の上に立っていて、遠くの教会の鐘が午前 3 時を告げた時、この鐘の音に音楽家らしい反応を示し、感想を述べてから、勇を鼓して、ためらいがちに求婚をする。だが夫選びについて自己の判断の重大さを意識し

ている Anne は、John の求婚にもよそよそしい返事を与えただけで、求婚は不首尾に終わる。余りに誠実で小心で、殆ど喜劇的とも言える、この求婚の場面は、全て会話で成り立って、人間臭い雰囲気のを漂わせている、些細な、きわめて個人的なエピソードであるが、その直後の地の文は一転格調のある語りとなり、この場面を普遍的なものに昇華する。ここに、John の勇気と自己犠牲を、恋している兵士という勇敢な行為の中に示そうとしている。

…but Anne in her place and the trumpet-major in his, each in private thought of no bright kind, watched the gradual glory of the east through all its tones and changes. The world of birds and insects got lively, the blue and the yellow and the gold of Loveday's uniform again became distinct; the sun bored its way upward, the fields, the trees, and the distant landscape kindled to flame, and the trumpet-major, backed by a lilac shadow as tall as a steeple, blazed in the rays like a very god of war. (Chap.XI)

この言葉は全体のトーンは極めて荘重に語られ、John の本質が内部から湧き上がり、その外観を荘厳に包んでいるかのような姿を描出している。夜明けと共に、鳥や虫の世界は生氣を取り戻し、太陽が昇り、遠景の木々や野原は炎となって燃え上がる。その中でラッパ隊長は「教会の尖塔のように高い、ライラック色の影を後ろに従えて、戦いの神そのもののようになり、曙光の中に燃え立っていた」のである。この瞬間のすぐ前に、思いのままにならない求婚という人間的行為がなされていた。この求婚の行為自体、野原、木々、海や空などの一部として包み込まれてしまう。朝日に燃え立つ「戦いの神」のような崇高な姿のラッパ隊長の前景には、恐ろしいものが待ち受けている。それを暗示するように馬と車輪のガラガラという音が響いている。個人的世界は捨象され、より本質的に抽象された姿が、普遍的な尺度を以て見られるように期待しているかのようなハーディの文章である。

Anne は John を「女というものは男の方を愛していなくてはだめなんですよ」(第13章)と言って拒否したが、彼女の「愛している人」は John の弟で商船の一等航海士の Robert である。孤高の人とも言うべき John と比べれば、Robert は余りにも世俗的で、現実と強く接触を保っている。肉体と本能と気まぐれの体现者である。John が相手との距離を保ち慎重に行動するのに対し、Robert は人の領域に余り気にせず侵入して行く。Matilda と結婚するつもりだという手紙を出し、突然帰郷する。彼の登場は正に侵入そのものである。彼を迎えに仲間全員が出掛けて行ってしまった後、戸締まりのされた粉挽き小屋に帰って来て、鍵の掛かっている窓から侵入した。その上、彼を歓迎するために用意されていた料理の食材を使って、彼自身が料理を作り、歓迎する筈の父たちが帰って来た時、Robert に迎え入れられることになる。作者はユーモアを交えてこの場面を描いている。兄 John の静かな登場とは違って、

Robertは王や王妃が近隣にやって来て大騒ぎのところに、サウスハンプトンに上陸し、知り合って2週間しかたないMatildaとすぐに結婚式を挙げて粉屋の跡を継ぐべく帰って来た。帰宅の仕方も意表を衝くもので、万事騒動を予感させる行動である。Robertが自宅に連れて来たMatildaを一目見た兄のJohnは驚く。彼女が竜騎兵連隊の多くの同僚と不品行な関係にあった女であることを見て取り、家から追い出した。婚約者が突然姿を消してしまったのに大騒ぎをしている弟に、Johnは事の真相を話す。Robertは翌日彼女を追って行く。だが途中で追跡の熱意を失って家に帰って来た。元来喜劇的人物であるRobertはこの場面でもその個性を十分に発揮している。途中で追跡に疲れたRobertは投げ銭をして追跡の是非を占い、追跡は是と出ると、こんな占いには意味はないとばかりに止めてしまう。喜劇的な行為であると共に、簡単に衝動に駆られて行動に移し、後悔するという性格がここに示されている。Johnにとってもこの事件は不運であった。Matildaに因果を含めている場面をDerriman老人に目撃され、Festusを通じて、AnneがそれをJohnがMatildaと逢瀬を楽しんでいたと誤解してしまい、Johnから心が離れて行ってしまう。JohnはAnneの態度でそのことの察しがつくが、固く口を閉ざして何も語らない。

或る種の悲劇的様相を持つ筈であるRobertの結婚式の突然の中止ですら、作者は喜劇的エピソードを用意している。男やもめのLovedayと未亡人のMrs Garlandが、彼からの求婚が既になされていたとはいえ、Robertの結婚式が直前になって取り止めになったため、式当日の様々な各種の料理を無駄にしない便法として、急遽結婚式を挙行したのである。社会的上位者としての未亡人が娘の思惑も考え躊躇していたが、結婚を急ぐ絶好の口実として、田園的な儉約精神を利用するという、ちゃっかりとした心理をユーモラスに描いている。初老の男と中年の女らしい実用的結婚式、その中で各々別の立場で惨めな思いをさせられるRobertとAnneの心理描写も喜劇的な味わいを持つ。しかも、Robertの結婚式用の料理は傷むといけけないので、近くの人々に来てもらって、その日のうちに食べてもらう際の作者の「食べる」ことを‘consumption’や‘consumed’とか、「食べる作業をしてくれる人」を‘operator’とか言う、大した内容でもないことを、大袈裟に勿体ぶった言い換えをする表現に面白味を誘う仕掛けが施されている。

作者の喜劇的場面創出はその直後悲劇が待っていようと関係なくなされる。Johnに紹介される直前のMatildaとGarland母子との会話は、互いに性格の違いもあって、噛み合わない状態が続く。話題は風から林檎に移り、「St Swithun'sに雨が降ると林檎が豊作になることから、この地方では聖人が林檎に洗礼をする」という民間伝承のことになる。次に話題は洗礼から「命名式」に移り、その子の名がKing Georgeに因んで付けられたことから、国王の当地滞在は‘the corn turns yellow’頃までだという話になる。‘yellow’という単語に反応して、手袋の流行の色が‘yellow’で、長さは‘elbow’までのが流行っていると言うと、今度は

‘elbow’ をドアにぶつけて今もそれが痛むと話題が飛ぶ。話題が尻取り遊びのように、互いに内容は違っていても、台詞の中の音の連想で話題が何時までも続いて行くのである。読者は一種の言葉遊びの滑稽さを楽しむことになる。「ぱっとしない詩人の作品の或るものに見られるように、意味よりも音の方がかなり優先している」と作者が言う、この会話(=discourse:第17章)は気まぐれな Matilda の習癖によってコミカルなものに仕立て上げられている。また読んでやや不自然に感じられても、舞台上で演じられるのを聞けば面白味は更に増すであろうと思われるのも、Matilda の女優という職業を読者に印象付けるのに役立っているよう。

Loveday と Mrs Garland が結婚し、2つの世帯が1つになり、John の連隊が別の場所に移動してしまうと、Anne と Robert の2人を隔てる障害は殆ど無くなってしまう。Robert は Matilda と別れて1ヶ月位するともう Anne の御機嫌取りをし始め、2人の心が近づくようになる。だが Matilda に求婚したであろうという、Anne の John に対する誤解を放っておけずには彼の誤解を解く。Anne は真相を知り John の誠実さが分かり、衝動的に彼に手紙を出す。しかし、その手紙が愛情の告白を意味すると母に指摘され、Anne の心は再び冷却する。確立した自己を持たない Anne は、外からの働き掛けで無思慮な行動を取り続けている。行動基準に必ずしも確たるものがあるわけではなく、判断が揺れ動くことの多い Anne でも、Festus に対する嫌悪感は依然として変わらない。

折しも、丘の上からナポレオン軍の警戒をしていた村の老兵たちの早合点で、仏軍の上陸の知らせとなり、近隣は大混乱を来たし、Anne は Robert とキスをして、別れ別れとなる。この騒ぎの中逃走の途中で、Anne は Festus に操を奪われる危機に遭遇する。

戦時下という異常な状況は、根拠のないことでも容易に人を混乱に追い込み、平常心を奪ってしまう。ナポレオン上陸に絶えず怯えているこの地の住民全体に緊張感が漂っている最中、フランス軍上陸の誤報は村人を如何に興奮させたか驚く程である。見張り役の Tullidge 伍長と退役軍人の Simon Burden が合図を見誤り、その上 Robert の空耳と村人の早合点で大騒ぎとなり、オーヴァークームの村人が一斉に逃げ出した。一寸した勘違いが火種となって、噂が噂を呼び火の粉が四方八方に飛んで行くように村人全体に誤報が拡散して行く。災害発生時の流言飛語が飛び交い、恐怖が増長して行く過程が肌を感じられる場面が繰り広げられる。2人の老人の見張りの勘違いに端を発した騒動はあちこちに波及する。遠くの大砲の轟きを聞き Loveday 親子は望楼へ駆けつけた。すると Tullidge 伍長は海岸の方から、フランス軍上陸を知らせることになっている、干し草の山に点火された合図があったと言う。しかも Robert までが大砲の音が聞こえると言い出す始末である。望楼の下ではもう騒ぎが始まっていて、せわしげな人馬や車の物音が聞こえて来る。荷馬車で飛ぶように通り過ぎて行く肉屋は「フランス軍が上陸したんだよ！…バドマスは上へ下への大騒ぎだ」(第26章)と言う。

肉屋はRobertの呼び声に答えるが、手綱を引きもせず全力疾走で走り去って行く。緊迫した情景が続くのである。Robertが粉挽き小屋に戻ると、Mrs LovedayとAnneが着替えを済ませて出発の準備を整えていた。この間、息も付かず事件は進展する。緊迫感に包まれた連続描写は、小気味良い筆致のテンポと身の引き締まるような緊迫感と戦慄を読者に与え、物語の中に引き込む。

誰もがこの混乱の中で必死に生き延びようとしている時、兵隊は皆、竜騎兵も義勇農騎兵も志願兵も、バドマス海岸を目指していた。その一団の中に悪漢Festus Derrimanがいた。彼はこの異常事態の中で異常な性格を明らかにする。フランス軍と戦うために他の兵隊とバドマスに行くのを止め、Anneの跡を追って、キングスベアへ向かうことにする。自己中心的で、果たすべき義務も個人的欲望を前にして簡単に放棄してしまうFestusは、下男のCripplestrawにその行為が「勇気ある雲隠れ」と思われるだろうかと尋ねる。

‘Now, sir, if you had not been in love I own to ’ee that hiding would look queer, but being to save the tears, groans, fits, swowndings, and perhaps death of a comely young woman, yer principle is good, you honourably retreat because you be too gallant to advance. This sounds strange, ye may say, sir; but it is plain enough to less fiery minds.’ (Chap XXVI)

ここでは主従の立場は逆転している。現実を見据え、嘘で固めた主人の姿を見つめながら、Cripplestrawの言葉は道化のように婉曲な表現で真実を明らかにする。この後すぐに、途中でドイツ人部隊の将校から、フランス軍上陸は誤報だと聞かすが、その時行軍して来た仲間の義勇農騎兵隊の一団を見ると、彼らには誤報について知らせずに逆に彼らの士気を煽るために剣をかざして一団の先頭に立つのである。

It was a magnificent opportunity, and Festus drew his sword. When they were within speaking distance he reined round his charger’s head to Budmouth and shouted, ‘On, comrades, on! I am waiting for you. You have been a long time getting up with me, seeing the glorious nature of our deeds to-day!’

‘Well said, Derriman, well said!’ replied the foremost of the riders. ‘Have you heard anything new?’

‘Only that he’s here with his tens of thousands, and that we are to ride to meet him sword in hand as soon as we have assembled in the town ahead here.’

‘O Lord!’ said Noakes, with a slight falling of the lower jaw.

‘The man who quails now is unworthy of the name of yeoman,’ said Festus, still keeping

ahead of the other troopers and holding up his sword to the sun. 'O Noakes, fie, fie! You begin to look pale, man.'

'Faith, perhaps you'd look pale,' said Noakes, with an envious glance upon Festus's daring manner, 'if you had a wife and family depending upon ye!'

'I'll take three frog-eating Frenchmen single-handed!' rejoined Derriman, still flourishing his sword.

'They have as good swords as you; as you will soon find,' said another of the yeomen.

'If they were three times armed,' said Festus— 'ay, thrice three times—I would attempt 'em three to one. How do you feel now, my old friend Stubb?' (turning to another of the warriors). 'O, friend Stubb! no bouncing health to our lady-loves in Oxwell Hall this summer as last. Eh, Brownjohn?' (Chap.XXVI)

Festusはハーディが創作した人間像とは思えない程の異常な人物と言えよう。フランス軍上陸の知らせで恐怖心に捕らわれ、Anneを守ると言い訳し敵前逃亡を試みる。誤報と分かった後は安心して虚勢を張り、仲間の義勇軍を欺き、先頭に立って勇気を示し愛国心のあるところを大衆に訴えて賛辞を得ようとする。誤報の知らせは遅かれ早かれ皆にも明らかになる筈だということはFestusにも分かっているだろうに、すぐ失敗するような悪戯をしている。当然、義勇軍は事の真相が分かるとやり場のない怒りをFestusにぶつけるのである。

このような一時しのぎの兵隊が、ヨーロッパを制圧したナポレオン軍にはどんな手段を使っても勝ち目はなかったろう。ハーディもこの辺の事情を考慮して義勇隊の武勇伝を正面から描くよりは、喜劇風に描写することで、当時のイギリスの追い詰められた悲愴感を薄めたのであろう。そのため、他の作品での悪玉一女たらしのTroy軍曹、女を力づくで意のままにするAlec等一でも、人間的な面を備えているが、このFestusは徹底的に悪役を割り当てられている。Festus1人の活躍で当時の異常事態の中での人物像が戯画化され、戦時下の一般住民の深刻な苦しみや愚かな行動が表面に出て来るのをさけているようである。

Festusは最後まで間の抜けた悪玉に描かれている。臆病者で且つ卑怯者で、自分の欲しいものを手に入れるのに手段は選ばない。自営農という自分の身分を誇示し、弱い者に威張り、放蕩生活に身を任せている彼は、Anneを好きになるが、Anneは彼を嫌い続けている。何とかしてAnneを手に入れたいFestusは、或る日バドマス辺りを警備して、オーヴァークームに帰る途中、前から狙っていた彼女が草原を1人歩いているのを偶々見付けた。気付いて逃げる彼女を、獲物を狙う肉食獣のように追いかけるが、子兎のように身軽に走る彼女に追い付けない。そこで一計を巡らし、故意に転倒し気を失った振りをする。脳卒中を起こしたのではないかと、こわごわ戻って顔色を窺うAnneに、頃合い良しと起き上って再び襲い掛かる。

Anneは腹を立て逃げる途中、小川に掛かった一枚板の橋をずらして、渡ろうとしたFestusを小川に転落させ、ずぶぬれになって、再びAnneを追いかける気力をなくした彼を笑う。このAnneのとっさの機転の小気味良さと、Festusから首尾良く逃れられた安心感が、ナポレオンに襲われるという恐怖心におののくオーヴァークームの住民の苦悩にオーバーラップし、ユーモラスな中にも、スリルのある描写の効果と相俟って読者を物語の中に強く引き込んで行く。

厚顔無恥なFestusはフランス軍上陸誤報の際もAnneを狙う。農騎兵を騙して怒りをかい、彼らの追撃から逃れた後、Anneの避難場所を方々探し回り、とうとう嗅ぎ出した時も奸知に長けた行動を取る。Anneの行方を尋ねるRobertには嘘の情報を与え、彼を別の方向に行かせてから、Anneの跡を追う。遂に草原の一軒家にAnneを発見すると、彼女のいる小屋の扉に体当たりをし、剣を抜き鎧戸をこじ開けようとする。戸がどうしても開かないと分かったら、Anneを暫く軟禁状態にした挙げ句、小屋の周囲から離れたように見せ掛け、馬のチャンピオン号でAnneを小屋からおびき出して襲い掛かる。しかし、Anneはチャンピオン号にしがみついて、又もや危機から逃れた。ここでもFestusは最後まで悪玉である。自分の持ち馬で逃げるAnneについての、彼女が馬から転落死したら自分の責任になるので大変だと言う台詞は、転落死したら可哀想だとか、非道いことをしてしまったとかいう、通常の人々の反応とはかけ離れたものである。作者はFestusに、他の作品にも見られない程の異常な人格を与えている。暴れ馬になったチャンピオン号からAnneを救ったJohnに、彼は仕返しをされ殴られるが、殴った相手がRobertと勘違いをし、執念深く恨みを抱き復讐の機会を狙う。

最後にAnneを手に入れることになるRobertにしても、Festusの異常さとはかなり離れてはいるが、人の品性に関しては兄Johnと比較すればFestusの方に近い。勿論Robertは正義感や義務感に溢れているし、人並み以上優れた能力の持ち主ではあるが、ハーディがJohnに付与した人間的誠実さには少し欠けている。それ故、物事を判断する際に揺れが生じることが多い。決心をした後にも気持ちがぐらつき、気持ちを別な方向に移し易い。Festusと同様に、決断する時には常に自分が中心にある。勿論そこに悪意が潜んでいる訳ではないが、軽率で軽薄であるという印象は免れまい。家族に対しても想いは深い、思慮は浅く、結果として周囲に波乱を招くことが多い。

父Lovedayの経営する製粉所を継ぐのを承知せず、船乗りになるべく家を飛び出したが、心を入れ替えて家業を継ぐために、婚約者Matilda Johnsonを連れて帰って来た。実体が最後まで明確にされないような、得体の知れない女性Matildaとサウスハンプトンで知り合って2週間で婚約し、家に連れて来て結婚しようとする。Johnの的確な処置でこの危ない結婚から逃れると、時も置かず、それまで大事に育まれて来たJohnとAnneの愛を無視し、Anneに積極的に働き掛け彼女の愛を得ようとする。JohnがMatildaのことでAnneに誤解されたままエ

クソンベリーに移動して、自宅を留守にしている間、Robertは徐々にAnneの心の中に入っていく。Matildaの過去を知っているJohnが、結果的に2人の間を引き裂き彼女を追い払ってしまったのだが、AnneはそのことをJohnはMatildaと古くからの知り合いで、Matildaと結婚したいのでRobertから引き離したと、勝手に邪推し、誤解したことがRobertに有利に働いたのである。

Anneを危機から救出したJohnは、上陸騒ぎが誤報であったと知れた時、AnneとRobertが恋するもの同士らしく再会を喜び合う情景を目撃する。Robertのことを考えて、Anneから身を引こうと決心したJohnだが、密かにAnneからの手紙を読んでいるのをRobertに見られてしまう。兄の恋心を知ったRobertはAnneを諦めると言い出した。だがJohnは或る女優に恋をしているのだと嘘を付く。その結果、RobertとAnneをバドマスの劇場に招待することになる。この舞台には女優としてMatildaが出演していた。Johnにも余りに意外だったので驚いていると、Anneはその表情を熱狂していると見て、Matildaが彼の恋人に違いないと誤解して帰って来る。

一方、Matildaの復讐心をFestusが悪用し、彼らが密告することで、Robertはプレス・ギャング（水兵強制募集隊）に急襲されが、曲芸的な逃亡技術によって危うく彼らに捕らえられずに済んだ。全1章にわたる強募隊とRobertとの攻防と彼の負傷は読者を息もつかさせないスリルとサスペンスの興奮に導く。この事件はRobertに大きな心境の変化を引き起こした。Anneとの恋がやっと実ろうとする時、愛国者としての立場を自覚し、強制徴兵から逃れたことを後悔した。「それじゃあぼくは、英国の船乗りとして、もう望みがないのだろうか」（第33章）という反省に駆られる。彼の中に「愛情と愛国心との迷い」を見て取ったAnneは、彼を引き留めるために腐心する。ドレスを着て彼を魅惑しようとしたり、悲しげな表情で哀願したりする。しかし歴史的事件に、このような個人的感情は飲み込まれてしまい、「海に出て行くなんていう不人情な考えを実行に移して、水車場での仕事を捨て」志願兵になるべく、ネルソンが率いる艦隊の旗艦ヴィクトリー号のハーディ艦長を訪ねるのである（第33章）。採用されて艦に乗り込む時、Robertは見送りに一緒に来たJohnに向かって、多少感傷的になりながら、兄のためを思ってAnneから身を引くと言う。

‘Now, Jack, these be my last words to you: I give her up. I go away on purpose, and I shall be away a long time. If in that time she should list over towards ’ee ever so little, mind you take her. You have more right to her than I. You chose her when my mind was elsewhere, and you best deserve her; for I have never known you forget one woman, while I’ve forgot a dozen. Take her then, if she will come, and God bless both of ’ee.’ (Chap.XXXIV)

RobertがAnneを兄に譲るという1人よがりであり自己満足的な動機から、この艦隊に乗り込むというのは、一見、祖国や故郷の危急存亡の時、祖国のために愛する人への想いを断ち切って戦地に赴くという英雄的行為に見えるが、深くものを考えずに衝動的に行動するこれまでの彼の姿を見ていれば、英雄的行動を全うできるとは期待できない。最初Matildaと婚約し、次にJohnとAnneの間に入って来てJohnからAnneを横取りし、今度は瞬時の愛国心に突き動かされて、Anneを兄に譲るために艦隊に入ったという一連の行動の先には、Anneへの想いが断ち切れなければ、また帰って来る可能性があることである。善良ではあるが、世間知らずの我が儘なRobertの行動は、悪役に徹しているFestusのそれと陰陽の関係で結ばれ、互いの距離はそれ程遠くないように思われる。

Robertの動機がどうであろうとも、その行動によって引き起こされる事態は印象的且つ感動的なものである。物語の登場人物である架空の存在のRobertが、実在の人物で、作者ハーディの遠縁に当たるハーディ艦長と面会したり、Robertの出帆後悲しみに暮れるAnneがジョージ三世と出会い会話を交わすといった場面は、当時の読者に強い喜びと共感を引き起こしたであろうことは容易に察知できよう。更に当時のイギリス国民を劇的興奮に巻き込んだ、歴史にも有名なヴィクトリー号が生きては帰らぬ提督と共に、音もなく幻のように海上を滑走し、卵を逆さまにしたような形となって、水平線上に乗ったと見る間に線上彼方に消えて行く、トラファルガー海戦の場への旅立ちの場面で、読者の感動的喜びは最高潮に達するのである。ネルソン提督に対する惜別の念と、過去の故国が忍んだ苦難が引き起こす愛国心とが読者の胸を熱くした上に、恋する女の涙ながらの、恋人の見送りという哀切な要素が加わる。この掲載雑誌購読者に対して、作者が意図した、急な展開による息を付く暇もないメロドラマ的快感の連続という工夫が十分に効果を発揮している。こうした娯楽性は、物語後半において特に顕著に現れている。

トラファルガー沖海戦が、ネルソン提督戦死という犠牲を払って、イギリス海軍勝利という結果に終わっても、Robertはすぐには戻って来ない。ポーツマスに上陸後、彼がパン屋の娘Carolineと恋仲になったという噂や、近々結婚する旨の手紙が、Anneのもとに次々と届く。この事態を知りAnneの心は決定的にJohnに傾く。更にFestusは自分を殴った相手がRobertではなく、Johnだと知ると、MatildaをJohnの恋人と思い復讐の気持ちで結婚することにした。この噂はLoveday家にも届き、MatildaとJohnの仲は「みんな作り話で、ぼくは一時だって彼女を想ったことなんかない」(第37章)というJohnの言葉でAnneの疑いが晴れる。また誤って熱湯がこぼれ、Anneにかかり火傷する寸前に、Johnが身を挺して守り、自らが火傷するという小事件の助けもあって急速に2人の仲は接近して行き、もう少しで結ばれるという時、JohnのもとにRobertから無神経で、身勝手な、外から見れば滑稽だが、Johnにとれば、深刻にならざるを得ない手紙が届く。

On landing last autumn I fell in with a young woman, and we got rather warm as folks do; in short, we liked one another well enough for a while. But I have got into shoal water with her, and have found her to be a terrible take-in. Nothing in her at all — no sense, no niceness, all tantrums and empty noise, John, though she seemed monstrous clever at first. So my heart comes back to its old anchorage. I hope my return to faithfulness will make no difference to you. But as you showed by your looks at our parting that you should not accept my offer to give her up — made in too much haste, as I have since found — I feel that you won't mind that I have returned to the path of honour. I dare not write to Anne as yet, and please do not let her know a word about the other young woman, or there will be the devil to pay. I shall come home and make all things right, please God. In the meantime I should take it as a kindness, John, if you would keep a brotherly eye upon Anne, and guide her mind back to me. I shall die of sorrow if anybody sets her against me, for my hopes are getting bound up in her again quite strong. (Chap.XXXVII)

船乗りに憧れて勝手に水車場を飛び出し、気まぐれのように父の跡を継ぐべく帰って来ても、得体の知れない Matilda との結婚騒動を起こし、Anne に横恋慕をし、志願兵となり Anne と別れた後も、Caroline と恋愛関係になるが、それが我が意に沿わないと飽きてしまい、また Anne に戻って来ようとする。この無節操で無定見な行為は Anne を混乱させ、John を悲しみの底に突き落とす。作者はこういう Robert の手紙の文章の直後、誠実な John の態度を次のように書いて、弟の身勝手さとの対比を際立たせ、彼自身の取るべき方向を示している。

He had resolved, for the sake of that only brother whom he had nursed as a baby, instructed as a child, and protected and loved always, to pause in his procedure for the present, and at least do nothing to hinder Bob's restoration to favour, if a genuine, even though temporarily smothered, love for Anne should still hold possession of him. But having arranged to take her to see the excavated figure of the king, he started for Overcombe during the day, as if nothing had occurred to check the smooth course of his love. (Chap.XXXVII)

水兵としてヴィクトリア号に乗り込む時、Robert は Anne を John に譲ると断言したにもかかわらず、手紙で Anne に対する権利の復活を一方的に主張し、自分の不行跡を秘密にし、Anne の気持ちを自分の方に向かせておいておいてくれと頼み込んでいる。水夫と港の女との異性関係というお定まりの単純な発想で、Robert のこの勝手気儘な行為を片付けるのは簡

単である。またRobertの水夫志向型という個人的気質の中に、その原因があるのも確かであろうが、この個人的な部分が、当時の戦争状態が背景にある社会事情という外的部分に刺激を受け、増幅して行ったという問題もあろう。戦争が起こす社会的不安定が、人心の不安定をも引き起こしている。またJohnとRobertとの間のAnneの気持ちの揺れ動きも、文学上の必然によるものではなく、些細な、小さな偶然性や当事者間の誤解が作者により恣意的に作り上げられた結果であるという印象が強い。或る者は利那的に生き、或る者は真に正しいものを見抜くことができず、確固たる決断ができない。AnneのRobertとの結婚は、このような2人が結び付くことを意味し、先の展望がきかないものとなっている。

この社会不安の中に自分の財産を守るべく、日夜汲々としている地主Derriman老人の存在は、最後にAnneに大きな影響を与える。甥のFestusが自分の財産をやがて遺産として手に入れることを嫌がり、またナポレオンの掠奪からも財産を守ろうと、守銭奴のように気を揉んでいた。Festusを恐れ、用心深く屋敷を閉ざそうとしているが、それでも不安でお金や書類、遺書等をブリキの箱に入れてAnneに預けたりする（第24章）。彼のこの姿は、ナポレオン侵攻に対して防備を固めるイギリスの姿で、Derriman老人の財産を狙うFestusがナポレオンの戯画であるとも言える。実物をデフォルメさせて滑稽に描くという気質喜劇の登場人物として、創り出されている彼の行動はFestusへの対応で顕著である。貴重品を持っているとFestusに取られるのではないかと不安になり、また他人に預けても不安で預けた先に舞い戻る様も笑いを誘う。Festusが老人の邸に訪問したり滞在することでも絶えず怯えている。特に第9章では、旅に出た筈の老人が留守宅を心配して舞い戻り、Festusが勝手に邸を使い、仲間と酒盛りをしているのを発見する場面はドタバタ喜劇的でさえある。

‘Man a-lost! man a-lost!’ he cried, repeating the exclamation several times; and then ran and hid himself behind a corner of the building. Soon the door opened, and Festus and his guests came tumbling out upon the green

‘Tis our duty to help folks in distress,’ said Festus. ‘Man a-lost, where are you?’

‘Twas across there,’ said one of his friends.

‘No; ’twas here,’ said another.

Meanwhile Uncle Benjy, coming from his hiding-place, had scampered with the quickness of a boy up to the door they had quitted, and slipped in. In a moment the door flew together, and Anne heard him bolting and barring it inside. The revellers, however, did not notice this,...

(Chap.IX)

「道に迷った！」と叫んでFestusたちをおびき出し、彼らが外でウロウロしている間に、

自分は邸に入って錠をおろし、追い出してしまう。この騒動は目で見える舞台上で演じられたら爆笑の渦が起ころう。財産を巡る Derriman 老人と Festus の攻防戦は物語の最後まで続き、第40章になってやっと決着が付く。Festus が Matilda と共謀して財産を強奪しようとした晩、Derriman 老人はその危機を感じ、Anne に託してあった宝箱を持って逃げ出した。そして、「老デリマン氏は、甥が自分を困らせる事態から、その晩ばかりか次の日も、そして永遠にうまく逃げおおせた」(第40章)のである。日頃の心痛とこの晩の激しい攻防のため、彼は翌朝、骨と皮となった身体から魂が抜け去って衰弱死した状態で発見された。宝箱は Anne の部屋の暖炉に隠してあったのが後になって見付け出され、その中にあった遺言には彼の財産の大半が Anne に譲渡され、Festus にはその残りが遺贈されることが書かれていた。

この興奮が冷めやらぬ時、John はイベリア半島の Arthur Wellesley 卿の指揮下に入るべく出征することとなった。時は既に「短期兵役、異種混成、一時的な従軍などでロマンティックな雰囲気失われてしまった」(第41章)時期に達していた。John とその連隊の仲間が粉挽き小屋でのお別れのパーティで Anne たちに別れを告げる時、「ラッパ隊長を含む5人までが続く数年のうちに故人となり、彼らの骨は戦闘のあった地に朽ち果てた」(第41章)と作者に予言されている。一方 Anne は、この重大な別れの場面になっても、この物語の最初の場面で窓から牧歌的なオーヴァークーム村の景色を漫然とながめているように、彼女なりに幾つかの大きな経験をして来たにもかかわらず、現実に行っていることの重みも理解できずに、相変わらず閉鎖的な精神に閉じこもりながら、外の世界におずおずと対処している。John との別れの最後の言葉がそれをはっきりと示している。

‘John,’ said Anne, holding his right hand in both hers, ‘I must tell you something. You were wise in not taking me at my word that day. I was greatly mistaken about myself. Gratitude is not love, though I wanted to make it so for the time. You don’t call me thoughtless for what I did?’

‘My dear Anne,’ said John, with more gaiety than truthfulness, ‘don’t let yourself be troubled! What happens is for the best. Soldiers love here to-day and there to-morrow. Who knows that you won’t hear of my attentions to some Spanish maid before a month is gone by? ’Tis the way of us, you know; a soldier’s heart is not worth a week’s purchase — ha, ha! Good-bye, good-bye!’

Anne felt the expediency of his manner, received the affectation as real, and smiled her reply, not knowing that the adieu was for evermore. (Chap.XLI)

Anne は現実の姿が理解できていない。弟の Robert の認識も Anne とそれ程かけ離れてはい

ない。このJohnの言葉の直後、彼の言葉が続く。

Then with a tear in his eye he went out of the door, where he bade farewell to the miller, Mrs Loveday, and Bob, who said at parting, 'It's all right, Jack, my dear fellow. After a coaxing that would have been enough to win three ordinary Englishwomen, five French, and ten Mulotters, she has to-day agreed to bestow her hand upon me at the end of six months Good-bye, Jack, good-bye! (Chap.XLI)

Robertのこの軽薄な言葉は、Johnの「兵隊の心なんて1週間の買い物だけの値打ちもない」というのはJohnの心ではなく、Robertの心を表していることを示し、Anneが「見せ掛けを真実として受け入れている」というのは、Johnのこの、悲しみに満ち、本心を偽った言葉を指すのと同時に、RobertのAnneに対する「誠実さ」にも言及しているように思われる。いずれにしても、この2人の態度とは対照的に、真に誠実なJohnは現実になされた自分の立場をよく理解し、弟Robertに対する道義心から愛するAnneへの想いを振り切り、決然として死地に赴いたのである。

The candle held by his father shed its waving light upon John's face and uniform as with a farewell smile he turned on the doorstone, backed by the black night; and in another moment he had plunged into the darkness, the ring of his smart step dying away upon the bridge as he joined his companions-in-arms, and went off to blow his trumpet till silenced for ever upon one of the bloody battle-fields of Spain. (Chap.XLI)

作者にとっても、読者にとっても、行きて戻らぬ懐かしい過去の闇の中へ、Johnは父の手にしたロウソクの光に一瞬照らされた後、身を躍らせて消えて行った。

通奏低音として、この作品を最後まで流れている「時」と「戦争」という概念は、人間の意志や希望、欲望に関わりなく存在を主張し、我々を巻き込んで、流し去ってしまう。「戦争」という社会不安を抱えた「時」の流れの中では、我々は極限状態に置かれ異常な行動を取ったり、時として偶然、歴史の深淵を覗き込むこともある。FestusやMatilda、更にはRobertやDerriman老人の常軌を逸した滑稽でもある行動は前者のものであろうし、第13章でのAnneの認識は後者のものである。

Anne now felt herself close to and looking into the stream of recorded history, within whose banks the littlest things are great, and outside which she and the general bulk of the

human race were content to live on as an unreckoned, unheeded superfluity. (Chap.XIII)

しかし Anne はこういう経験をしながらも、内面の世界では人間的成長はなく、元のままに留まっているのである。John が自己を犠牲にしてまで守った Robert と Anne の愛。彼らは John の誠実さに何も応えることもなく、「時」に流されて「余分なもの」として生きて行く。Robert と Anne によって継承される平和な世界は、John のような他の人を第一に考える自己犠牲的人間の、言葉を多く要しない善意によって保たれるのだと作者は主張しているのであろう。真に高潔な John は、自分を抑制し、目立つことなく善意の行為をなし、幸福な 2 人に慈愛に満ちた目を向けながら、国のために帰らぬ兵士として戦場に赴く。「時」に流されたり、「戦争」によって変質させられることもない、誠実さを胸に「時」の霞の中に消えて行くのである。

だが、このような作者の主張にもかかわらず、John の余りに模範的で、穏やかな人柄と、Anne のごく平凡な夢想的な性質、Robert の悪人でも善人でもない中途半端な人間性などによって、主人公不在とも言われ、この作品は比較的評価が低いとされているのであろう。

注

1) *The Personal Notebooks of Thomas Hardy*, p.132

2) *The Early Life of Thomas Hardy*, p.21

He [Thomas Hardy] also found in a closet *A History of the Wars*- a periodical dealing with the war with Napoleon, which his grandfather had subscribed to at the time, having been himself a volunteer. The torn pages of these contemporary numbers with their melodramatic prints of serried ranks, crossed bayonets, huge knapsacks, and dead bodies, were the first to set him on the train of ideas that led to *The Trumpet - Major* and *The Dynasts*.

3) Millgate, *Thomas Hardy, His Career as a Novelist*, p.149

4) *The Return of the Native*, p.109

5) Howe, *Thomas Hardy*, p.41

6) *The Early Life of Thomas Hardy*, p.167

ハーディが 1879 年、*Cornhill Magazine* の編集長レズリー・スティーヴンにジョージ III 世時代の物語を書いていると告げた時、彼は次のように答えている。

“I can only tell you what is my own taste, but I rather think that my taste is in this case the common one. I think that a historical character in a novel is almost always a nuisance ; but I like to have a bit of history in the background, so to speak; to feel that George III. is just round the corner, though he does not present himself in full front .”

参考書誌

1. *The Trumpet-Major*, The New Wessex Editions; The Novels of Thomas Hardy, ed. by P.N. Furbank, Macmillan, 1975
2. *The Return of the Native*, The New Wessex Editions, The Novels of Thomas Hardy, ed. by P.N. Furbank, Macmillan, 1975
3. Hardy, Florence Emily, *The Early Life of Thomas Hardy 1840-1891*, Macmillan, 1928
4. Cecil, David, *Hardy the Novelist*, Constable, 1969
5. Guerard, Albert J., *Thomas Hardy*, New Direction, 1964
6. Gregor, Ian, *The Great Web*, Faber and Faber, 1975
7. Hawkins, Desmond, *Hardy, Novelist and Poet*, David and Charles, 1976
8. Howe, Irving, *Thomas Hardy*, Collier Books, 1973
9. Hurst, Alan, Hardy, *An Illustrated Dictionary*, Kaye and Ward, 1980
10. Millgate, Michael, *Thomas Hardy, A Biography*, Oxford University Press, 1979
11. Millgate, Michael, *Thomas Hardy, His Career as a Novelist*, The Bodley Head, 1971
12. Purdy, Richard Little, *Thomas Hardy, A Bibliographical Study*, Oxford University Press, 1979
13. Taylor, Richard H, *The Personal Notebooks of Thomas Hardy*, Macmillan, 1978
14. Williams, Merryn, *Thomas Hardy and Rural England*, Macmillan, 1978
15. 大沢 衛 (編) 「ハーディ研究」 (現代英米作家研究叢書) 英宝社, 1976
16. 大沢 衛・吉川道夫・藤田 繁 (編) 「20世紀文学の先駆者トマス・ハーディ」 篠崎書林, 1978
17. 藤井 繁 「黄昏」 千城, 1988
18. 本田顕彰 「ハーディ」 (20世紀英米文学案内4) 研究社, 1969

(本稿は平成10年度跡見学園特別研究助成費による)